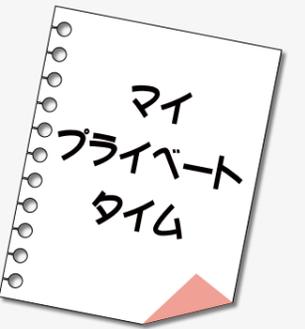


# 私のストレス解消法

観音寺市長(香川県) 白川晴司  
Seiji Shirakawa



## 60の手習い

観音寺市出身の作家、芦原すなお氏の作品「青春デンデケデケデケ」が第105回の直木賞を受賞しました。この作品は観音寺市に住む高校生たちがエレキギターに魅了されバンドを結成し、仲間たちと織り成す人間模様を通して成長していく青春物語です。

その主人公のモデルの一人である原氏が私の近所に住んでおり、芦原先生の帰省の折に地元でライブを開催しています。たまたまライブに参加した時、私の大好きな曲「いちご白書をもう一度」を彼のバンドをバックに歌いたいとお願したところ快諾を得、下手ながらその会場で歌



おやじバンド「セイジイズ」

うことになりました。「ギターを練習して自分で演奏できればもっと気持ちよく歌えますよ」という原氏からの勧めがあり、その気になって即、門下生になりました。

青春時代に戻った気分です。加山雄三やベンチャーズなどの曲を肩こりにもめげず、日々練習に励み、おやじバンド「セイジイズ」を結成することができました。以来、年に数回地元のアマチュアバンドの仲間たちとライブを楽しんでいます。

特に思い出深いのは障がい者の方とともに開催したチャリティライブです。障がいを持つ子どもたちが一生懸命曲に合わせて一緒に歌う姿を見た時には、万感胸にせまり思わず涙が出てきました。音楽には何の垣根もないことを改めて感じた次第です。

最近では老人会や婦人会に出向き、弾き語りや抒情的な曲を演奏しています。楽しんでいただいているかどうかは疑問ですが、自分としては非常に満足しています。今後も第二のライフワークとして、バンド仲間たちと一緒に楽しんでいきたいと思っています。

## 「ちようさバカ」の市長と呼ばれて

本市には「ちようさ」と呼ばれる太鼓台が120台ほどあります。秋祭りなどで五穀豊穡を感謝し、地域の各神社に奉納

正月に帰ってこなくとも、祭りには必ず帰ってくるという若者たちがいます。地域の老若男女が集い、長幼の序の教えが連綿と続いているちようさという伝統文化を、大切に守り続けていくことが地域づくりの原点であると思っています。

## 心の癒やし 愛犬バル

時代はペットブームです。私は犬の大好きです。4年ほど前、近所でうろついている野良犬に近い犬が現れました。首輪をしているので、どこかの飼い犬なのではないかと、飼いがつかりません。わが家で平気で寝泊りし、フーテンの寅さんのごとくすぐ旅に出てしまいます。

ある日、ほかの町でラジオ体操に行く子どもが野良犬にかみつかれたという新聞記事が目にとまりました。もしかしたら、その犬が事件を起こすことも無きにしもあらず。あわててわが家で面倒を見ることになりました。

平成7年7月に彼は生まれたようです。平成7年といえば、1月17日、あの阪神淡路大震災が発生した年です。4月には本市にある観音寺中央高校が甲子園選抜初出場で初優勝という快挙を成し遂げ、私が旧観音寺市の市長として初当選したのが、彼の生まれた7月です。彼とは何かしら因縁めいたものを感じています。そんな彼も16歳。人間に例えると90歳



ちようさの担ぎ上げ 中央の右から2番目が筆者

される大型で豪華な山車です。江戸時代中期には存在していたとの記録があり、京都祇園祭の山鉾が原型といわれています。京都から各地に伝わる過程でその地域独特の山車が出来上がったものと思われ



老人会での弾き語り

本市のちようさは、金糸銀糸の刺しゅうに彩られた掛布団や布団、精密な彫刻が施された雲板など豪華絢爛でかつ、重さ約3t、高さ5.5m、担棒の長さは13mもあり、非常に堅牢な造りの山車です。そのちようさを約100人の若者たちが掛け声とともに差し上げるさまは実に壮観です。

私の地元の自治会にも江戸時代から

にもなります。最近めっきり元気がなくなり、内臓疾患なのか腹水がたまるようになり、内臓疾患なのか腹水がたまるようになり、かわいそうですが腹水を抜いてもらっており、一度に抜く量はなんと3kg。悲しそうな泣き声を聞きながら、押さえつける私の心まで痛みます。腹水を抜き出すと余命は3カ月ぐらいたそうです。しかし、彼はもう8回も抜いています。獣医の先生いわく、信じられない生命力の持ち主だそうです。術後は回復し、食欲も旺盛になりますが、本当に信じられない生命力です。

そんな彼もそう長くは生きられないと思いますが、驚くほどの生命力で、できる限り長生きをして、私の心を癒やし続けてもらいたいと願っています。



祭り姿の愛犬バル